



まいど！ざいむ局です！ ～ 起業家編 ～

関西元気企業

～手紙で繋がる永遠の想い～

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」、松尾芭蕉の『奥の細道』の有名な冒頭の一節である。月日というのは、永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、来ては去り、去っては来る年もまた同じように旅人である。

人は様々な思いで、月日を過ごし、そして時が流れていく。過ぎ去った月日の思い出は、個々の記憶の中で生き続けるが、目まぐるしく変化する日常の中に埋没し、いつしか思い出も色褪せていく。

でも、ふと、心だけが「あの時代」、「あの場所」、「あの瞬間」に戻る時がある。

きっかけは、その当時に流れていた歌、どこかで嗅いだ香り、見覚えのある風景、写真など、手紙もその一つである。

今回は、亡くなった旦那様の手紙がきっかけで起業された、有限会社プロシード会長の村山順子さんに、起業に至るまでの経緯と亡き夫の手紙に秘められた想いなどをお伺いしました。

●起業される以前はどのようなお仕事をなさっていたのですか。

西宮の女子高を卒業後、早く社会に出て親孝行したいという思いから4年制大学ではなく、短期大学に進学しました。

実家の鹿児島から遠く離れた神戸で勉強させてもらっている両親への感謝の気持ちもあって勉学に励み、いつしか小学校の教師になることを夢見るようになっていました。

その夢が叶って教師になったものの、「こんな若輩者の私が、先生なんて申し訳ない」という気持ちがいつも付きまとい、それを振り払うように子供たちにはいつも全力で接していました。

不器用な性格がそうさせたのかもしれませんが、そうしないと子供たちに申し訳がないと思っていたのです。

幸い、教師冥利に尽きる素晴らしい生徒と保護者に巡り合い、勝手ながら教師という仕事が天職なのではないかを感じるようになっていったのです。

でも、そう感じ始めたのも束の間、私の目の前に運命の人が現われたのです。「この人とずっと一緒に過ごしたい」、ただ、単純に「彼のそばにいたい」、そう思える素の自分がそこにいました。

「結婚しよう」という彼の言葉に迷わず頷いたものの、「教師という職業を続けるべきか」非常

企業情報

名称 有限会社プロシード
所在地 神戸市中央区坂口通6丁目1-17
設立 2000年 創業者 村山 順子
従業員 27名 資本金 6百万円
H P <http://www.himawari-service.jp/>



(有)プロシード会長
村山順子さん

に悩みました。でも、「一つのことにのめり込んでしまう自分の性格では、大好きな生徒たちにも迷惑をかけてしまうかもしれない」と思い、教師を辞め、主婦業に専念することに決めたのです。

結婚後は、素敵な奥さんになろうと、「朝起き会」という地域の主婦の方々が集まる勉強会に参加し、その勉強会に参加するメンバー7人で地域の清掃などを行う子育てサークルを立ち上げました。私生活では、元気な子供たち4人にも恵まれ、尊敬する夫と人、平和で幸せな日々を過ごしていました。この時は、こんな幸せな日がいつまでも続くと信じて疑いませんでした。

でも、人生とは分からないものです。人間というのは、必ず死ぬということを分かっている、普段それを強く意識することはありません。



旦那様とのツーショット

その日は、何の前触れもなく、突然にやってきました。

夫が出張先で倒れたとの連絡を受け、体がガタガタと震えだしました。家を出るときに聞いた「ってきます」の一言を最後に夫が死んでしまうといった現実を受け止めることができずしてました。頭に流れるのは、あの幸せな日々 of 映像。でも現実 is 残酷です。夫は、無言のまま帰宅。事実を目の前に突き付けられても、信じたくない自分がそこにいました。何度も、何度も話しかけました。問いかけました。なぜ、何も答えてくれないのか。泣き叫び、わめき、何をしても反応がない夫。

「いったいあなたは何が言いたかったの！」私は、大好きな子供たちのことを忘れてしまうくらい打ちひしがれました。悲しみに暮れ、毎日涙を流していました。そんな茫然自失だった私を悲しみの淵から救い出してくれたのは、亡き夫が私の49歳の誕生日に手渡してくれた手紙でした。夫の最後のラブレター。

そこには、『49回目の誕生日おめでとう、いつも生き生きしている順子を見るのは心嬉しいものです・・・今日は付き合ってくれてありがとう！本音をいうとそんな順さんを皆に見せびらかして歩きたい気持ちの表われと思って欲しい・・・』と書かれ、主人の書いた字がまっすぐ私に語りかけてきたのです。

毎日泣いていた自分の心がシャンとなった瞬間でもありました。同時に「こんな今の私を主人はなんと言うだろうか、悲しみに暮れている場合じゃない。生き生きした私を、あの人は愛してくれたのだから…」と、思い至ったのです。萎れていた花が再び生気を宿したように、その直筆の手紙は私を元気づけました。

夫と死別したことで、私は、2つのことを胸に刻みました。それは、「命には限りがある」ということ。そして、「明日は来ないかもしれない」ということ。夫は出張が多い仕事だったので、「休みがとれたらあそこに行きたいね」など私を誘ってくれていました。でも心ならずもその思いは叶わなかったのです。「今が大事、今いる場所で役に立つ人間になろう」、何度も自分に言い聞かせました。やがて、ずっと続けていた子育てサークルでの経験を活かして、地域のために尽くす仕事をしたいと思うようになったのです。それは、生き生きとした自分を亡き夫に見てもらいたいと思ったからです。大きな会社の請負ではなく、エンドユーザーと真正面に向き合った地域のためのお仕事。有限会社プロシードの立ち上げです。

●御社の業務内容を教えてください。

当社では、定期的に掃除等の家事を依頼できる家事代行業と、エアコンやトイレなどご希望の場

所を徹底的に綺麗にするハウスクリーニング業、不要な家財の処分や網戸の張替えなどをする整理収納業を行っています。このほか、ビルやマンションの日常清掃も行っていきます。

強みは、自分の家に入られることを不安がる顧客に対応するため、スタッフを顧客専属の担当制としていること。また、設立当時、家事代行業の草分け的存在であった当社が設立から10年以上かけて積み重ねた経験。この経験を活かして、最近では、新規に家事代行業に取り組みたい法人のための創業サポートも行っていきます。

●手紙を書くということを非常に大事しているということですが。

私は手紙に救われました。手紙は外から見るとただの紙です。でも、その紙に、人は思いを託すのです。私は、従業員やアルバイトの子たちの給料袋にも明細とともに手紙を同封しています。

ある時、当社を退職した従業員の方が封筒いっぱい私の手紙を持参され、「社長、この手紙は私の大切な宝物なんです」と言ってくれました。私は感動で胸がいっぱいになりました。

また、お客様に渡す請求書の中にもお手紙を添えることもあります。お客様の中には、請求書よりもまず手紙の話題をされ、褒めていただくこともあります。

私は、仕事以外でももっと手紙の感動を世の中に伝えたいと、定期的に手紙のセミナーを開催しています。神戸だけでなく、東京でも開催しており、その回数は80回を超えました。

●手紙を書く秘訣はありますか。

～自筆で～

やはり、自筆で書くことが大切です。自筆で書くからこそ、読む人は「どんな場所でどんな気持ちで書いてくれたのかな」と思いを馳せてくれます。私の元気の源となっている夫からのあの手紙も自筆でした。夫が亡くなる1カ月前の私の誕生日。「ちょっと出てこられない？」と呼び出され、行きつけの店で渡された手紙。その文字は、いつもの彼の字より少し震えていました。きっとほろ酔いのいい気分の時に書いてくれたのでしょう。その場面を想像すると温かい気持ちで胸がいっぱいになります。

～話しかけるように～

いざ手紙を書くとなると、時候の挨拶など形式にとらわれがちですが、肩の力を抜いて話しかけるように書いてみてはどうでしょうか。きっと素直な心になれます。

～「手紙セット」を携帯～

ポーチに便箋やはがき、お気に入りの筆記用具を入れてなるべく携帯してください。ちょっとでも時間があれば、手紙は書けるものです。長くなくてもいい。2～3行でも構わないのです。あらかじめ、便箋やはがきに宛名を書いておくと手紙を書く原動力になります。



セミナーで講師をされる会長

●今の若者に対するメッセージをお願いします。

若い人は目の前の仕事を一生懸命するべきです。「ねばならぬ」の仕事なんてありません。やらされているからやるのではなく、主体的・能動的に。何事も全力投球すると、その仕事がおもしろくなってくるものです。思いがあれば、行動は生まれます。

熱い志を持って、ブレないでください。ブレそうなときは、自分にまっすぐ向き合っただけで様々な疑問をぶつけてみるのも良いと思います。自分に対する手紙を書いて自分の心を整理するというのも手紙の素晴らしい使い途です。その際は決して他人のせいにはしないでください。自分がどうした

らいいのか、そのことだけを考えてください。

●会長の夢は何ですか。

いつか主人のそばに行った時に「よくやったな」と褒めてもらうことが夢です。私は、誰にも褒めてもらわなくていいと思っています。でも、主人にだけは褒めてもらいたい。それが私の唯一の夢・願いです。

<取材後記>

人は、常に死を意識しながら生きることはない。でも、「人は必ず死ぬ」ということは、誰でも知っている。それが、身近な人の死に出会うと改めて「死」というものを強く意識する。大事な人の死は、いつも悲しい。人はこんな時、何か納得する理由を見つけるために、「運命」だったと片づけることもある。

有限会社プロシードの創業者である村山さんは、ご主人の死に直面し、あまりの悲しみに鬱状態になったという。夫の死に直面し、その愛情の深さから「必死」に悩み、夫が何を言いたかったのかを「必死」で考えた。

決して、運命だと片づけず、「必死」に悩んだ者だけが、たどり着いた「必至」の世界（起業）だったのかも知れない。

私ごとで恐縮だが、「今度の関西元気企業は良かったよ!」、ホームページに掲載する度に笑顔で声をかけていただいた先輩が職場で倒れ、帰らぬ人となった。今までその言葉にどれだけ励まされ、勇気づけられたことだろうか。「関西元気企業」のファンでもあり、上司でもあったその方は、この「関西元気企業」をホームページに掲載しようと企画した時、反対の声もある中、背中を押してくれた人物でもある。

亡くなった上司の想いはいつもこうであった。「関西経済が元気になって欲しい」と。今、その想いは託されたと思っている。その託されたものは、当局が「必死」になって考え、「必至」になるよう繋げていかなければならないと感じている。

掲載している情報は、平成 25 年 11 月時点のものです。